

令和 5 年度

小 論 文

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部

学校教育学科

一般選抜(中期日程)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。
提出は 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

僕は、ここ100年の変化を、時代を象徴する「3つのC」で捉えるということを提唱している。まず1つ目のCはConsumption（消費）で、消費社会のこと。アメリカでは1920年代から、日本では戦後（1940年代後半）から、よいモノやサービスをたくさん享受するということが生活・人生の豊かさを表す消費社会がスタートした。物質的なモノとの関わりに関心の重点が置かれていた時代だ。

2つ目のCはCommunication（コミュニケーション）で、情報社会のこと。1990年代にインターネットと携帯電話の普及によって、社会の情報化が始まった。情報社会では、オンラインであってもリアルであっても、よい関係性やコミュニケーションに関わっていることが、生活・人生の豊かさを象徴するようになった。社会的（ソーシャル）な関わりが関心の的になった時代である。

そして、3つ目のCはCreation（創造）で、現在は「つくる」ということが時代を象徴する「創造社会」の初期であると僕は考えている。この創造社会は、2010年前後から始まり、いままさに各分野で「創造化」が起き、創造社会として発展している最中なのだ。創造社会においては、自分で何を「つくっている」か、また、どれほど「つくる」ことに関わっているかが、生活・人生の豊かさを象徴するようになる。創造的（クリエイティブ）な方向へと関心が向かう時代である。

創造化は、社会のいろいろな分野で起きつつある。まず、わかりやすいのが、ものづくり。3Dプリンターやレーザーカッターのようなデジタル・ファブリケーション（ファブ FAB）の技術によって、ものづくりの民主化が起きている。これまで工場で大量生産的につくるしかなかった「モノ」が、自分の自宅でプリント（出力）できるようになったのである。

これにより、必要な人が必要なモノを必要な分だけ、自分の状況に合ったかたちで「つくる」ことが可能になったのだ。創造社会

の到来を示す、もっとも象徴的な例が、このFAB(ファブ)によるものづくりだろう。

しかしながら、社会の創造化が始まっているのは、ものづくりの分野だけではない。「地域活性化」、「地方創生」の文脈のなかで、住民参加型のまちづくりが全国のあちこちで行われている。自分たちの地域をどうしていきたいのか、どうしたらもっと魅力的なまちになるのか、これから具体的にどうしていくかということについてワークショップを開いたりして、住民たちが自分たちで考え、話し合うということが行われるようになってきているのだ。これも創造社会のイメージが湧きやすい好例だろう。

2020年には、コロナ禍によって社会の創造化は否応なしに加速した。誰もが、自分たち家族の暮らしを自分たちなりにつくったり、自分たちの組織の働き方を自分たちでつくったりするということを経験した。これまでの常識の画一的なあり方は、もはや成り立たなくなり、各自が自分たちでどうするのかを考えなければならなくなったわけである。

実際に、学生を含め、僕のまわりには、コロナの時代に突入したことで、「創造社会」を実感した、という人が多い。これまでは誰か他の人がつくった一般的な基準ややり方をただ受け入れていただけだったと気づくとともに、スーパーヒーローが一挙に助けてくれたりはしないし、もはや日本より進んでいるどこかの国のモデル・手法を持つてくればよいというわけでもないことを痛感し、自分たちで自分たちのあり方・やり方をつくっていかなければならないのだ、と感じるようになった、というのである。

これから僕たちが生きる社会は創造社会であり、そこでは、それぞれの人が自分達なりの創造性を駆使し、問題を発見・解決する社会になる。情報社会において、あらゆる分野・領域が「情報化」されてきたように、これから創造社会ではあらゆる分野・領域が「創造化」されていくだろう。学び・教育の領域も例外ではない。社会の変化にともない、学びのあり方も変化し、学びの支援者(教師、親、関係する大人)の役割も変わるのである。

創造社会は、一人ひとりが、使うものや考え方、やり方、あり方を自分(たち)でつくる社会だ。これは、ある面では、ポジティブなことであり、一人ひとりの力が発揮されるとともに、自分たちに合ったものや考えを生み出すことができるということである。一人ひとりが自分の生をいきいきと生きることにつながる。

他方、創造社会は、一人ひとりが、自身の創造性を発揮して生きていかねばならぬ時代でもある。そうしなければ、生き抜けない(サバイバルできない)という厳しい状況でもあるのである。例えば、コロナの状況下で自分は、自分の家族は、どのように暮らしているのか、そのことについて考えずに、これまで通りの生活をすることはできない。かといって、誰かが解決してくれるわけでもない。自分で、自分たちでなんとかするしかないのである。

まちづくり・地域づくりもそうだ。どこかの誰かが素晴らしい案や計画をもってきて、住民である自分たちにとっても素晴らしい未来がやってくる、なんていうことはまず起こらないだろう。自分たちの住んでいるまち・地域のことは自分たちで考えていかなければならない。

さらには、地球温暖化や環境破壊の問題。どこかの一部の専門家が解決してくれるのを待っているだけでは、立ち行かないだろう。一人ひとりが自分にできることをやり、知恵を絞り、協力し合う……そういうことなしに、このグローバルで難解な課題は、解決へと歩みを進めることは不可能だろう。

このように、創造性がすべての人に求められるのは、それが素敵なことだからというだけでなく、その必要があるからなのである。一人ひとりの持つ創造性を持ち寄り、それによって、社会・人類の様々な課題を乗り越え、また新たなもの・方法・希望を生み出していく。そういうことがますます重要な時代に突入しているということである。このように考えれば、創造社会は一つの理想の未来として、選択肢の一つとして挙げておけばよいようなものではなく、社会が、そして人類が、これからも生き続けていくための不可欠なフェーズなのだと思えるべきだろう。

社会の近代化のなかで我々が見て見ぬふりをしてきたこと、先送りしてきたこと、解決できないまま来てしまったことが山積みになり、限界を迎えている。そのような厳しい状況は、多くの人がそれぞれの立場・観点から創造性を最大限に発揮することでは打破できない。そのために、一人ひとりが創造性を発揮すること、創造的に考え動き、つくることができるようになること、そのための教育や支援ということ、それらが極めて重要な時代に突入しているのである。

今が創造社会の初期で、まだ一部の人が、一部の領域でしか、「創造化」が起きていないとすると、これから、どのくらいで創造社会が本格化するのだろうか。僕は、2040年頃には、かなり社会の創造化が進むと見ている。つまりいまの小学生低学年が成人するころ、あるいは、いまの大学生が三十代、四十代になるころには、広く、「つくる」こと、創造的であることが生活・人生の豊かさを象徴するような社会になっているだろう。

そんなに短い期間に、社会の変化は起きるのかと思う人もいるかもしれない。しかし、僕たちが最近体験した情報社会の例を見れば、四半世紀も経てば社会は大きく変わるといえることがわかる。

こう考えると、「つくること」についても、20年経てば「一人ひとりが自分たちのモノや仕組みをつくる社会」になっているということは大いにあり得ることだろう。「え、欲しいもの、全部買っていたんですか？ よくそれで欲しいもの手に入りましたね」と、未来の若者は言うだろう。あるいは、「自分でつくらず、全部人から買わなければいけない時代というのは、ずいぶんと貧しい世界ですね」と言われてしまうかもしれない。

プロの人につくらせて自分はつくらない、というのではなく、一緒につくる人になる。しかも、それは単にものづくりの話だけではなく、暮らし方、働き方、生き方、地域や社会のあり方までも自分たちでつくるようになっていく。これが、創造社会の未来像である。

出典・井庭 崇「創造社会 ジェネレーターが求められる社会とは」(市川 カ・井庭 崇『ジェネレーター 学びと活動の生成』学事出版 二〇二二年 所収)より、一部を改変した。

設問一 課題文中で述べられている「創造社会」とはどのような社会のことか。二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二 筆者は傍線部のように「創造社会では、一人ひとりが創造性を発揮することが必要だ」と主張しています。あなたにとって「創造性を発揮する」とはどういうことですか。課題文を踏まえながら自分の体験や見聞を交えて八〇〇字以内で述べなさい。